

言葉を覚えるのが幼児期であっても、漢字を教えるのは小学校に上がってからではないかと考えている人も多いと思います。前述したように、私の二歳の息子が「教育」という漢字を読んだことがきっかけとなって、私は、幼児にとっては、“かな”よりも漢字のほうがやさしいのではないかと考えるようになりました。しかし、これは理論で証明できるものではありません。そこで、昭和28年から42年までの15年間、小学校の現場で漢字教育を実践してみました。

その当時は、一年生がもっとも学習能力が低く、学年が進むにつれてその能力が高まるのだから、教える漢字も学年が進むごとに増やしていくほうがいいと信じ込んでいました。現在でも、すべての教師にそうした先入観があります。ところが、実際に漢字を教えてみると、一年生が一番よく覚えるのです。逆に学年が進むにつれ、漢字を覚える力が衰えていったのです。総合能力では一番低いはずの一年生が、漢字を覚える能力では一番優れていたのです。実際に目の前の子どもがどんどん漢字を覚えていく様子を見るのは驚きでした。当時、一年生の目標は30字ほどでした。私はこれを300字くらいに増やしてみようと考えていました。ところが、子どもたちはいくらでも吸収します。500字になり、とうとう700字にまでなりました。わずか一年間で、小学校六年間で覚える漢字の八割方を覚えてしまったのです。そこで、ひょっとしたら就学前の幼児には、もっと漢字を覚える能力があるのかもしれないと思いついたのです。

すべてものごとには最適の時期があります。その時期に行えば容易にできるのに、はずしてしまうと急に困難になります。これを「臨界期」と呼びますが、「言葉の臨界期」は幼児期です。ですから、どんな子どもでも三歳くらいで母国語を身につけ、幼稚園では先生の話を理解し、

また自分の考えを他人に伝えることもできるのです。ところが、たとえば1920年に発見された狼に育てられた少女カマラの場合などは、言語の学習は困難を極めました。救出した牧師夫妻の熱心な指導にもかかわらず、その後生きた九年間に45語しか覚えられなかったと報告されています。臨界期前の幼児が三年間で2000語もの言葉が覚えられるということと比べると大変な差です。臨界期を過ぎてから始めた学習がいかにむずかしいかわかりいただけだと思います。これは言語学者のすべてが認めるところですが、言葉を覚えるのと同時に漢字を学べば、言葉と同じように吸収されていくものではないかと考えたのです。

昭和43年から三年間かけて、今度は、就学前の幼児に漢字教育を始めました。最初に始めたのは大阪の小路幼稚園というところでした。

園長の井上先生という方が「先生、小学校で一生懸命やっているけれども、これは幼稚園のほうが向いているかもしれないね」とおっしゃったことがきっかけになりました。実際にやってみて驚いたことは、幼児の漢字学習能力というのは凄いものだということです。漢字教育をしないときに100だった園児の知能指数が、漢字学習を始めてからは110になり、120になり、ついには130という知能指数になったのです。

幼児期の漢字教育は、明らかに知能を高める働きがありました。これはたくさんの漢字を覚えたということよりも、漢字を知ったことで加速度的に知能が高められたという点が大切です。

ポイント:「テストすればちゃんと書ける漢字を、作文に使わないのです」。かつて私が小学校の指導主事をしていた頃に、先生が困って言ったことです。これも“かな”から教える弊害です。漢字を習った子どもはやたらと漢字を使いますが、間違った使い方も多いものです。それを先生がいちいち直すわけですから、子どもは前へ進めなくなってしまうのです。使いたくても使えなくなるのです。